

生き方に理にかなった自信をもつことはできるか

—バーナード・ウィリアムズにおける『真理と真理への忠実性』の役割—

中根杏樹(慶應義塾大学/日本学術振興会)

本発表の目的は、バーナード・ウィリアムズの哲学において『真理と真理への忠実性(Truth and Truthfulness)』(2002)がどのような役割を担っているのかを、「自信」をキーワードに解明することである。

これまでの研究状況において、『真理と真理への忠実性』は、不遇な扱いを受けている。たとえば、『スタンフォード哲学事典』の「バーナード・ウィリアムズ」という項目においてでさえ、『真理と真理への忠実性』は、経歴紹介以外では登場しない(Chappell & Smyth, 2018)。

しかし、丁寧にみていくならば、『倫理と、哲学の限界(Ethics and the Limits of Philosophy)』(1985)においてすでに真理と真理への忠実性はウィリアムズの哲学における重要なキーワードとして機能していることが分かる。こうした関連は、『真理と真理への忠実性』が軽視されているがゆえに、包み隠されたままになっている。

私は、本発表において、『倫理と、哲学の限界』と『真理と真理への忠実性』の関連を明らかにし、冒頭で述べたように、『真理と真理への忠実性』の役割を描き出したい。そのために、私は三つの段階を踏むつもりである。

第一段階として、『倫理と、哲学の限界』においてすでに、真理と真理への忠実性がウィリアムズにとって重要なキーワードであることを確認する。ウィリアムズはその本のなかで、われわれが自らの生き方に対してとりうる理想的な状態として、自信(confidence)を提示している。そして、その自信は、真理、真理への忠実性、個々人の人生の意味という三つの要素によって支えられるとみなされている。

第二段階では、自信を支える三つの要素は本当に両立するのか、という問題を提起する。これらの要素は一見すると問題なく両立すると思われるかもしれない。しかし、実のところここには、一方が成り立つならば他方が成り立たなくなるという関係にあるのではないかと、懸念がある。最初に真理と真理への忠実性という組み合わせについてみてみよう。まず、本当に真理に忠実に考え、正確性を追求したときに、客観的な真理の存在を認めることができるのだろうか、という疑問がある。さらに、仮に真理というものを認めたととしても、逆の方向に緊張を見ることが出来る。ニーチェの道徳の系譜学が道徳へのコミットメントを揺るがすように、歴史的な真理は真理への忠実性に対するコミットメントを覆すかもしれない。さらに、真理と人生の意味、真理への忠実性と人生の意味という組み合わせを見てみると、そこにもやはり緊張関係が成り立ちうる。現実の恐ろしさから目を背けることなしに、真理を踏まえ、真理に忠実であってなお、人生に意味を見出し続けることはできるのだろうか。もしかすると、われわれの有意味な人生というのは、幻想のうえでしか成り立たないものなのかもしれない。

第三段階では、こうした緊張を緩和させる試みとして、『真理と真理への忠実性』を解釈する。私はウィリアムズの議論を次のように解釈していくつもりである。ウィリアムズはまず誠実性・正確性といった真理への忠実性を詳細に分析することで、それらの概念が真理を前提しており、真理を掘り崩すものではないことを

示している。さらに、真理の忠実性に関して、弁護的な(vindictory)系譜学を描くことで、真理の忠実性に対するコミットメントを擁護している。そして、人生の意味と、真理、真理への忠実性に関しては、人生が真理・真理への忠実性のもとで有意義であることはありえないという主張は理論的に立証されえないということ、有意義に生き続けられると考えることはわれわれにとつて実践的に必要であるということから、それらの両立する余地を示し、その両立への希望(hope)を抱き続けるという道を提示している。

以上の議論が成功したならば、われわれは『真理と真理への忠実性』が果たす役割の解明という当初の目的に加え、希望という概念の重要性をも示しうるだろう。また、以上の議論から副次的に、意味ある人生が可能であるという信念は、カントにおける実践理性の要請と同様の地位をもつということもまた明らかになるはずである。というのも、Willaschek(2010)が指摘するように、(1)ある信念が理論的には立証されえないこと、(2)その信念が実践的に必要であることはまさに実践理性の要請がもつ特徴だからである。この洞察は、カントとウィリアムズの距離を正確に把握するのに貢献するだろう。

参考文献

- Chappell, Timothy & Smyth, Nick (2018). “Bernard Williams”. *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
- Willaschek, Marcus (2010). “The primacy of practical reason and the idea of a practical postulate”. In Andrews Reath & Jens Timmermann (eds.), *Kant’s Critique of Practical Reason: A Critical Guide*. Cambridge University Press.
- Williams, Bernard (1985). *Ethics and the Limits of Philosophy*. Harvard University Press. (森際康友・下川潔訳(1993),『生き方について哲学は何が言えるか』, 産業図書)
- Williams, Bernard (2002). *Truth and Truthfulness*. Princeton University Press.